

宮山 久美子 三十一音の叙情詩

夕つ日を背負ひて寄せくる波の穂が

渚の岩をはつしと掴む

綴帳の上がるがに山の霧晴れて

斜面を埋めし花匂ひたつ

月見草月の色して咲きにけり

遠野のわらし踊りいでこよ

着地する地は風まかせしまらくを

ふうわりふうわり気球たんぼぼ

咲きしなふ山吹の花明明と

野仏の肩つつむ夕ぐれ

山際 ヒロ

時雨やみ吾の住む里を隈なく

まどかなる月透きとおらせり

リハビリの出で湯通いの途すがら

満ちくる月の光を浴ぶる

ゆるゆると流るる雲を照らしつつ

出でし望月の笑まうが如し

雲一つ無き大空に牙えわたる

十三夜月心にぞ染む

澄みきつた静かで穏やかな心で丁寧に詠った、月の歌四首。様々な月を独自の視点で捉えており、一首一首の清らかさが鑑賞者の内面を浄化する。絵を思わせる印象的な歌。☆昭和五年生

猪股 洋子 感性きらめくオリジナルの俳句世界

何

ものにも束縛されない自由な心で、切れ味鋭い独自の俳句を創作し続けている猪股氏。作品が放つ強烈なだけではない唯一無二の存在感は、一句一句が生きている証であり、鑑賞者の心に新鮮な風を吹かせてくれる。高い意識で作句に取り組み、俳句を心の伴侶として日々精進しているに違いない。熱く、豊潤で、若々しいエネルギーに満ちた氏の世界は、現代人の疲れた心を元気にする活力源となるだろう。

女流画家の蔵窓ひらく五月かな

原生林の木洩れ日ひとつ涼しけれ

夕波にはなせし遺髪虹かかる

夏雲やカウベルの音ひろがりぬ

ブルーベリー摘むアイガウの空高し

稜線の窓やダイナーの青鬼灯

一流好みのまゝの旅立ち薔薇真白

アマリリス友かがやきて議長席

夕映えのさざ波よびて青き蘆

反抗期の片鱗きらり鶏頭花

試歩の杖たたずむ風の猫じやらし

水引の花憂鬱をむすびたき

差し向かふ志功の女体ぬくめ酒

山茶花や差しかけられし大き傘

流水に添ひて暮光の一輛車

市川 和美 氣持ちが今なお生きている俳句

身

の回りで目にする命の営みから季節を感じ、様々な思いを言葉に託している。静かで胸に染み入るような感動が言葉から滲み出し、鑑賞者の内面を潤いで満たしてくれる。風景を真つ直ぐに見つめ、人を温かく見守り、個々の題材と触れあう中で生まれた感動や思いを、音楽を奏でるように俳句にしている。どこか愛らしく、可憐で、ずっと味わっていたいような気になる市川氏の世界を、心の宝物としていつまでも大切にしたい。

春うらら猿の親子が露天風呂

感動の声広がりぬほたる狩

小さき手に母の手添うる流し雛

秋高しゆきつもどりつ番鳥

空澄みて香りただよふ金木犀

三毛猫が腹見せて伸ぶ冬日和

ししおどし天空高く響きけり

小豆粥すすりて遠き母しのぶ

夫に似し息子の背なに若葉風

秋晴やひとときは高し冠着山

はじめと孫の目点となる螢

食べごろか白き粉をふく吊し柿

屈強の夫を乗せるや茄子の馬

太陽に燃ゆるが如き花カンナ

寒き夜や家族揃ひて鍋囲む